

学びのセマンティクス， あるいは生存のエステティクス

広川 義哲（非常勤講師）

【要旨】

労働市場へと諸個人たちを分配していく機能を果たす学校において、柔軟に、かつ迅速に変動しつつある労働市場で生き抜いてゆくための「雇用されうる能力」が養成されるべきひとつの能力となる今日的な状況にあって、生徒たちにとっての学びの意味とは何だろうか。コジューヴの欲望論は、欲望の交錯によって社会が構成されることを説明し、ラカンは欲望と言語活動との構造的な関係を説明する。すなわち、「私の存在」を承認するであろう他者たちへ向けて、「私」は「私の望み」を表出する。他方で、ヘーゲルの『精神現象学』の「主人と奴隷」の一節は、脱身体化された欲望として振舞う主人とひとつの道具的身体として振舞う奴隷の間の承認をめぐる闘争論だったが、それにたいするバトラーの読解は、主体がみずからの存立の初発段階においてすでに外在的な規範を受領することを示唆している。「私の存立」を欲望しながらも、生徒の側からは統御することのできない教師の評価の視線を内面化し、他者たちからの承認獲得を実践する生徒たちの存在様式と、柔軟な労働市場への的確な適応を実践するポストフォーディズム型の労働者の存在様式が同期するならば、生徒たちは、環境の変動に応じてつねに生成変化せねばならない者として、すなわち、「いまだ存在していない者」としての脆弱性を織り込んだままで生存の美学としての「自己の練り上げ」を実践していくだろう。

【キーワード】 ラカン、主人と奴隷、生徒の学び、起業家的な自己

はじめに

かつてフーコーが『性の歴史』の第2巻である『快楽の活用』で目指したのは、どのようにして諸個人たちが「性」をめぐるさまざまな事象の主体として自分自身を経験することができたのかを理解することであり、とりわけ、古代ギリシャの人びとが、当時の哲学者や医者たちに教導されるかたちで、恋愛や結婚生活といった性や快楽をめぐるさまざまな実践をどのようにして「自分自身との関係」をめぐる実践として仕立て営んでいたのかを考察することだった。哲学者や医者たちが性や快楽に関して説く「正しく、そして確か

なこと＝真理」を，あるいは「欲望の正しい活用法」を参照することで，当時の人びとはどのようにして，自分自身に注意を払い，自分自身のありようを知り，自分という存在を解説し，そして，自分自身を欲望のひとつの主体として認識するようになったのかということを，フーコーは問うた。つまり，最晩年のフーコーの知的構成の作業の照準先は，「自己の自己との関係における真理の働きと，主体としての自己自身の構成」（Foucault 1984, 12=1986, 13）だった。

高校入試の状況や進路指導について問われたインタビューで，ある中学校に勤務する教師は，つぎのように答えている。

内申書が，「観点別学習評価」といって授業態度なども評価されるようになってきてから，子どもたちがすごくこの内申書を意識するようになりましたね。……先生の言いなりというか，かなり我慢して「いい子」を演じる部分があるんじゃないかな。たとえば，生徒に「馬鹿」とか暴言を浴びせる教師がいても，反抗しないんですね。中学生といえば反抗期真っ盛りで，当然反発するはずなのに，まるでしない。……ところが子どもや親がこんなに内申書にピリピリしているのに，それに気づかない鈍感な教師も多いんですよ。「最近の子どもたちは素直だねー」なんて，勘違いしている。（森口 1999, 34 f.）

高校受験，さらには大学受験での「筆記試験による一発勝負」から「調査書重視」への制度的環境の変化（cf. 中村 1999, 31 f.）を通じて，授業中に着席して教師の話をしかと聴き続けるか否かによって「学びの態度」が，あるいは，宿題を提出し定期試験にしかと備えるか否かによって「学びの意欲」が評価され，さらに，所属している部活動での役職やポジション，活動実績の報告によって，教科活動以外での学校生活における関心や意欲が評価される。「内申書／調査書」の名目のもとに設定される観点別学習状況として「態度」や「意欲」が評価の対象になるということは，「日常的な私のありよう」が評価の対象になることを意味しているだろう。生徒たちの学校生活が総体として「制御」されてゆく。

だが，生徒はなぜ，ときに幾人かの教師たちの眼には「素直な子ども」と映るほどに評価の眼差しに従順になるのか。なぜ，「自分」という存在が存立することの，あるいは「主体」として振舞うことのさなかにおいて，評価されることにかくも慣れ親しんでゆくのか。中学生であれば高校生へと，高校生であれば大学生へと，現在よりも後の教育段階へと加入するための切符を入手することを目指して，自身の学校生活の総体を教師による評価の視線のもとに曝すことが生徒にとっての外在的な権力（ということはつまり，教師

や学校)によって頑なに強要されているのではなく、むしろ、主体としての生徒によってみずから選び取られているとすれば、生徒と教師の制度的・権力的な非対称関係を生きる生徒の側に、評価されることへの、あるいは統治されることへの愛着とも呼べる何事かが胚胎しているのだろうか。

本稿では、上記のフーコーの問いの^{フロフロマティック}立て方を変奏させて、みずからをひとつの主体として企図し、主体として自身の生を歩むことを望む者の「欲望」を、学びの理論的な説明へと取り込んでみたい。そうして、「どのようにして生きてゆくのか」、あるいは、「何を人生の道すじとして選択してゆくのか」という実存的な問いを抱えた主体たちにとっての学びの意味の理論的な説明、いわば、学びの^{セマンティクス}意味論を彫琢したい。

まずは、ラカンが自身の精神分析理論の構成のための参照先として想定していたコジェーヴの欲望論を確認し、そして、複雑でありながらもしかし豊穡なラカンの理論体系から、「欲望」と「象徴的なもの」のトピックを抽出してみよう。

I 欲望と象徴的なものの網目——コジェーヴを読むラカン

1933年から1939年にかけてパリの高等研究院でコジェーヴによって行われた「ヘーゲル講義」にジョルジュ・バタイユ、レイモン・クノー、アンドレ・ブルトン、ピエール・クロソウスキーらとともにラカンその人も出席したことはよく知られており、ラカンの理論展開にたいしてコジェーヴが与えた影響はさまざまに説明されている (cf. Boothby 1991, 42 ff.; Langlitz 2005, 148 ; Macey 1995, 76)。ヘーゲルの『精神現象学』のフランス語への翻訳と注釈で構成されているその「ヘーゲル講義」でコジェーヴは、つぎのように語っている。

人間的欲望は他者の欲望に向かわねばならない。……例えば、男女間の関係においても、欲望は相互に相手の肉体ではなく、相手の欲望を望むのでないならば、また相手の欲望を欲望として捉え、この欲望を「占有」し、「同化」したいと望むのでないならば、すなわち、……個人としての実在性において「承認され」ることを望むのでないならば、その欲望は人間的ではない。(Kojève 1947=1987, 14 f.)

たとえば恋愛関係において人は何を望んでいるのかを想い描いてみよう。たしかに、性的快楽の充足を目当てに相手の肉体を欲望することがあるとしても、そのことだけで人間の欲望を説明することはできない、とコジェーヴは語っている。もし「私」がある人物を好いているならば、その人もまた「私」を好いてくれることを、「私」は望む。「私が欲望する人物 (= 私が好意を差し向ける人物)」の欲望が「私」へと向けられることを、「私」

は望む。「私」が相手の存在を承認しているのと同じように、相手が「私」の存在を承認することを「私」は望むのであり、相手の欲望を占有することを、相手の視線がこの「私」にくぎ付けになることを、「私」は望む。

あるいは、コジェーヴと同じくヘーゲル学者であり、また、ラカンが開催していたセミナーに参加していたイポリットは、こうしたヘーゲル的な欲望論を、つぎのように語り直す。

生の欲望は……他者の欲望への欲望である。……私は他者のうちに私自身を見定める必要がある。それゆえ、私が他者のうちに見出さなければならないのは私の欲望の欲望である。……こうして、私は他者のうちで私自身へと現われ、そして他者は私自身として私へと現われる。(Hyppolite 1971, 115)

イポリットによれば、まず、「私の存在の存立」は、他者の存在を前提にし、他者がこの「私」の存在を承認して、「私」の存在を欲望することに依存する。だから、「生の欲望」＝「私という存在の存立を望むこと」は、「他者の欲望への欲望」(*désir du désir d'un autre*)であり、「他者がこの私を欲望すること」を「私」が欲望することと同義になる。そして、そもそも、「私の存在」を承認する「他者の存在」が存立するためには、その他者を欲望する「私の存在」が前提とされなければならない。だから、他者は、「私の欲望の欲望」(*désir de mon désir*)を抱かなければならない。すなわち、「私が他者へと欲望を向けていること」を「他者」は欲望しなければならない。

こうして、たがいの欲望を欲望する視線の交錯によって、「社会」は構成される。コジェーヴから引用しよう。

人間は或る群の中でなければ地上に現われることができない。……群が一つの社会となるためには、数多の欲望が存在するだけでは足りず、さらに、群の成員それぞれの抱く欲望が、相互に、他の成員の抱く欲望に向かう必要があり、また向かいうるものでなければならない。(Kojève 1947=1987, 14)

フロイトの『夢解釈』を素材にして精神分析における言語機能を説明するなかでラカンが語ったように、「人間の欲望は他者の欲望のなかにみずからの意味を見出す」(Lacan 1966, 268)。そして、「欲望の最初の対象は他者によって承認されること (*d'être reconnu par l'autre*) である」(Lacan 1966, 268) のだから、一つひとつの行動を駆動する欲望はつねに社会的であり、間主體的なもの (*intersubjective*) であるだろう (cf. Usher & Edwards 1994, 61)。

ラカンにとっては、この地点において、言語のはたらきと欲望が何事かの関係をもつ。子どもの出生と成長について考えてみよう。

父親と母親のさまざまな動機が考えられる（そしてときに、二人の間で衝突が生じてしまう）とはいえ、この二人の存在は子どもが世界へと到来することの直接的な原因として考えられる。だから、子どもという存在は、そもそも、（その子どもにとっての）「他者の欲望」を原因として出来る（Fink 1995, 50=2013, 81）。そうしてこの世界に新たに到来してきた者としての子どもへと、親は「名前」を付与するだろう。子どもは両親の対話のなかで名付けられ、名前を与えられることによって「言語」の交換回路のなかへと入る（cf. Lemaire 1977, 125=1983, 105）。あるいは、親の想像によって、自身の子どもの将来における生のありようが家族の歴史＝履歴と撚り合わせられるかもしれない。だとすれば、子どもは、その誕生の時点からあるいはその以前ですら、親たちや家族によって構築された象徴的網目に嵌め込まれている（Stavrakakis 1999, 19=2003, 44）。そして、誕生した後、子どもは、自身が生まれてくる以前にすでに制定されてある言語と法の秩序に慣れ親しんでゆくことで社会化されていく（cf. 作田 2003, 92 f.）。

象徴的なものは我々に世界の体系全体を与えるものであるように思えます。人が物事を認識できるのは、人が語を持っているからに他なりません。（Lacan 1981, 199=1987, 32）

象徴界は、主体が己の存在という次元へと位置づけられるその形を与えてくれるものです。主体が己をこれこれのものであると認識するのは、シニフィアンを出発点としてのことです。（Lacan 1981, 201 f.=1987, 35）

「象徴的なもの＝象徴界」（le symbolique）のはたらきによって、言い換えれば、「私」の周囲にあるさまざまな事柄や事物を言語によって同定することによって、ということはつまり、言語という記号で表現すること（＝シニフィアン）によって、「私」は自分がどこに位置しており、どのような状態にいるのかを理解してゆく。父親と母親との関わりのなかで、子どもとして出生した「私」が母胎と一体化した存在ではなく、父親と母親と子どもというエディプスの三角形のひとつの角をなす存在であることに気づいてゆく（ラカンによりそくした表現をすれば、父親はシニフィアンを代理＝表象する者として、母親と子どもの想像的な一体化を否定するものとして介入する）。さらに、他方で、さまざまな位階序列を発生させる規範／掟も、さらにそうした位階序列化に応じてさまざまに果たされる人びとの役割も、ともに言語の秩序のもとで指示され、局在化されるのだから、規範

／掟と言語（の秩序）は混融する（Althusser 1993=2001, 42）。それゆえ、言語と法に従属することを通じて、人は主体として存立する。言語の世界を通じて自分自身の望んでいることに名を与え、自分の望みを表象することができるのだから、主体はシニフィアンによって決定されている（cf. Lacan 1973, 65=2000, 90 ; Stavrakakis 1999, 20=2003, 46）。「われわれ」という単語が持つ相互主体性（l'intersubjectivité du «nous»）（Lacan 1966, 299）が付託されている言語活動を通じて、「私の存在」は他者たちから承認されるのだ。

欲望の表出が生じるのは、つねにパロールの継ぎ目、パロールの出現、現出、顕現といった水準においてです。欲望は、あるパロールにおいて具現するときに出現します。つまり、象徴とともに出現するのです。（Lacan 1978, 273=1998, 102）

ことばに出して話すこと（＝パロール）によって、欲望が表出される。言語の使用と欲望の出現。象徴的なものの網目と、そこにおいて出来る「私の存在」の承認。「私は……」と第一人称主格で語り出すことで、「私の存在」を承認するであろう他者たちへ向けて、あるいは、「私」の社会的な位置を指定するであろう他者たちへ向けて、「私」は、「私の望み」を表出する。こうして、人びとが集合して生活する社会は言語活動を基盤として存立しているがゆえに、子どもがその初発の段階において遭遇する言語体系への導きによって、主体の同一性の獲得への道すがりが担保されるとともに、言語との関わりによって可能になった「自分の名」／「ひとりの主体としての私」を携えて社会生活へと参入してゆく（cf. Roudinesco 2011=2012, 44）。

けれども、象徴的なものの網目こそが「私という主体」を決定するのであるならば、この「私」は、「私」の外部にあるものへと不可避免的に依存するのだろうか。ラカンが精神分析理論を展開するにあたって、フロイトへの回帰を重要な理論的起点として構想していたとされる（cf. Boothby 1991 ; Julien 1990=2002）が、ラカンのそうした身振りにならって、つぎに、コジェーヴーラカンの影響関係の起源と見定められるヘーゲルへと回帰してみよう。

Ⅱ 主人と奴隷の承認をめぐる闘争——ヘーゲルを読むバトラー

ヘーゲルは、『精神現象学』の「主人と奴隷」の一節でつぎのように書いている。

主人は自立した（自主的な）意識であり、……物の形をとる独立の存在からどうしても離れられない他の意識と関係することによって、自立性を現実にも獲得した意識で

ある。主人は欲望の対象たる物そのものと、物の世界にとらわれた意識という二つの要素と関係する。(Hegel 1841, 141=1998, 134)

ここで、いまこの文章をお読みいただいているあなたが主人で、この文章を書いている「広川」があなたの奴隷である、と想定してみよう。そして、奴隷である「私＝広川」が主人である「あなた」のために「オムレツ」を調理する、と想定しよう。

「あなた」は、「自分好みのオムレツ」を欲望することができる。そして、「私」にその調理を命じる。「物の形をとる独立の存在からどうしても離れられない他の意識」、言い換えれば、さまざまな物を用い、さまざまに物を加工しなければならない奴隷である「私」と関係すること（オムレツ作りを命じること）によって、「あなた」は自立した意識（das für sich seiendes Bewußtsein）として振舞う、ということはつまり、自分が望むものをこの世に到来させて、それを自分が消費するという意味での自立性を「あなた」は獲得する。こうして、主人と奴隷の行為遂行の実質的な差異が明らかになる。

主人は奴隷を媒介にして物と関係する。奴隷にも自己意識はあるから、物に否定の力を及ぼし、物ではなくそうとする。が、同時に、……奴隷は、……物を加工するにとどまる。これにたいして、奴隷を介して物と関係する主人は、物をそっくりそのまま否定することが可能で、主人は満足感をもって物を消費する。(Hegel 1841, 141=1998, 134)

奴隷である「私」は、物を消費することができない。あくまでも「私」は、主人である「あなた」の命に応じて、「あなたの欲望するもの」を生産する。「私」は卵にたいして「否定の力」(Negieren)を及ぼして、卵を破壊して、「あなた好みのオムレツ」を調理する。そして、「あなた」は「私」によって調理されたオムレツを満足感とともに食す。奴隷はオムレツを調理し、主人はそれを消費する。

奴隷は独立自存の存在ではなく、一方では物を加工しなければならないし、他方では特定の物への従属を断ちきれない。……したがって、主人の目から見れば、他の意識がおのれの自立性（自主性）を破棄し、自分が相手にすることを相手のみずからおこなっている、という意味で、承認の関係がなりたっている。また、奴隷のおこなうことは本来は主人がおこなうべきことだから、相手の行為が自分自身の行為である、という意味でも承認の関係がなりたっている。(Hegel 1841, 142=1998, 135)

つねに「私」は「あなた好みのオムレツ」を調理しなければならない。この、悲しむべ

き奴隷である「私」（「あなた」にとっての「他の意識」である「私」）は、だから、みずからの「自主性」を破棄している。主人である「あなた」がその歓待によって「私」にオムレツを調理するならば、「あなた」は「私」の存在を承認している、と言えるだろうが、しかし、奴隷であるのは「私」であり、調理という行為遂行を果たすべきは「私」なのだ。ゆえに、「私」は「あなた好みのオムレツ」を調理するというその行為の遂行を通じて、主人としての「あなた」の存在を承認する。さらに、それゆえに、「いま生じているのは、一方的な、対等ならざる承認の関係（ein einseitiges und ungleiches Anerkennen）である」（Hegel 1841, 142=1998, 135）。

このように、『精神現象学』において提示されている主人と奴隷の関係はまさに承認をめぐる闘争でもあるのだが、主人の存在を承認しなければならない立場へと奴隷が固定され、しかもその間に、主人が奴隷にたいしてそれに見合ったかたちでの承認を与えないかぎりにおいて、主人はつねにその闘争に勝利する（cf. Brennan 1990, 295）。

けれども、バトラーのヘーゲル読解によれば、こうした主人の身振りには、「お前は私の身体であれ、しかし、お前がそうである身体が私の身体であることを決して私に知らせるな」（Butler 1997, 35=2012, 51）、という命令／契約が含意されている。

奴隷である「私」が「あなた」のオムレツ調理という行為を代理する者であることを、「私」は認めることができない。なぜならば、もし「私」が「あなた」の代理であることを認めてしまう（ということはつまり、奴隷が主人を補う者であることを認めてしまう）と、主人である「あなた」が望まない身体であること、「あなた」が「自分好みのオムレツ」を調理できないこと、つまり、主人の行為能力の不全性を暴露することになってしまうからだ（cf. Butler 1997, 36=2012, 51 f.）。

他方で、主人である「あなた」は、「自分好みのオムレツ」を欲望して、それを意のままに消費することができるという意味でひとつの自律（autonomy）を達成しているように思われるが、しかし、奴隷である「私」にその調理を託しているがゆえに、主人の自律は偽装されたものとなる（cf. Butler 1997, 36 f.=2012, 51 f.）。主人は「自分好みのオムレツ」を欲望することはできる（＝脱身体化された水準での行為能力を発揮することはできる）が、その欲望を自分の身体を用いて達成することはできない。同時に、奴隷は調理という行為を遂行することはできる（＝身体化された水準での行為能力を発揮することはできる）が、「自分好みのオムレツ」を欲望することはできない。ゆえに、主人と奴隷はそれぞれに代補しあう関係にある。奴隷である「私」も、そして主人である「あなた」も、ともに承認をめぐる闘争関係から逃れることができないのだ（cf. Brennan 1990, 295）。

こうした二項対称^{ダイアド}においてここでさらに着目したい論点は、奴隷の行為遂行に含まれる

「署名行為」である。

奴隷がせっせと働き、彼が作る事物に彼自身の署名を感じ取るとき、彼は自分が作り上げる加工物の中に、彼自身の労働の徴しを、対象自体を形成している徴しを認める。彼の労働は、一連の可視的で判読可能な徴しを生産し、そこに奴隷は、彼自身の形成行為の確証を、対象から読み取るのである。(Butler 1997, 36=2012, 51)

「あなた」の奴隷である「私」が調理したオムレツは、他の人物が調理したのとはどこか違った、「私」の調理行為に固有な風味を示すかもしれない。ならば、そのオムレツは、それを調理する行為が他の誰かの行為ではなく、「私」の行為であることをも含意しているだろう。けれども、オムレツに付与された「私」の署名は、主人である「あなた」に引き渡されるときに消去される。「私」が調理した「私風味のオムレツ」は、主人に供されるとき、主人である「あなた」が欲望したものとして、「私風味のオムレツ」ではなく「あなた好みのオムレツ」として、「あなた」によって消費される。したがって、「奴隷の労働は、規則的に徴しづけそのものを除去する徴しづけとして、それが流通する際には消去される署名行為として理解されねばならない」(Butler 1997, 38=2012, 53)。

調理の手順や微妙な塩加減によって「私風味のオムレツ」を生産する行為の結果として「私は今日も奴隷として生きている！」と、ある種の存在の感覚を「私」は獲得するのかもしれないが、しかし、「私」という存在が刻印されたそのオムレツがあくまでも「あなた好みのオムレツ」として「あなた」によって消費されることで、「私」はそうした存在の痕跡を収奪される。にもかかわらず、主人による収奪というこの出来事が、たとえそれが一時的であったとしても奴隷に自分という存在（の感覚）を獲得させるがゆえに、出口なしの二項対称において、奴隷は主人への服従化／従属化を欲望するとすれば、どうか。

自己の存在の存立を願う奴隷の欲望は、主人の身振りによってみずからが抑圧／禁止されることを承知していたとしても、みずからを抑圧／禁止する主人の身振りを欲望しなければならない。すなわち、奴隷である「私」が自分という存在を欲望するためには、そうした「私」の欲望を抑圧／禁止して、「私」を従属化する主人である「あなた」の権力的な身振りを、「私」は必要とする。こうした場合、収奪されてもなお、収奪する者へと愛着するという欲望は、「主体化＝服従化のあらゆる戦略の可傷性のようになにかを構成している」(Butler 1997, 62=2012, 78) だろう。言い換えれば、主体としてのこの「私」の側からは統御不可能な社会的および文化的な前提条件（＝奴隷の欲望を抑圧／禁止する主人の身振り）への愛着は、主体の存立の起源に宿る「可傷性／脆弱性」(vulnerability) を指し示している (Vlieghe 2010, 162) だろう。

Ⅲ 「起業家的な自己」の構成としての生存のエステティクス

近年になって産業／経済界から学校現場へと生徒たちに身につけさせるべく要求されている能力のひとつに、「雇用されうる能力」^{エンプロイability}がある。これは、「労働移動（転職）を可能にする能力」と「当該企業のなかで発揮され、継続的に雇用されることを可能にする能力」をあわせた能力として概念化されている。かつては、仕事や職務を遂行するために必要な知識や技能は、「OJT」(On the Job Training)によって習得されていたが、現在においては、それだけではなく、「自助努力」による「OffJT」を通じて自分自身の能力をみずからによって開発し、自身の雇用をみずからが確保していくことが求められている（松下 2010, 23 f.）。

安定的雇用関係から不安定で一時的な契約に向かう傾向（「雇用柔軟性」）、必要とされる新しい能力や技術にたいする適応力（「機能的柔軟性」）、そして、生産性と利潤に応じて決定される賃金体系（「賃金柔軟性」）^{フレキシビリティ}といったかたちで、労働市場が柔軟性を要請する（大沢 2004, 64 f.）なかで、何事かの利益をもたらす知識や技能を探索し、それをみずからの力によって習得していくという生き方、いわば「起業家」^{アントレプレナー}として自身の人生を構築していくことが要請されている。

こうした文脈において、教育の成果として目指される能力が「個人の人生編成」（松下 2010, 31）へと焦点づけられ、「生存のマネジメント」（松下 2009, 120 f.）を営む「起業家的な自己」（the entrepreneurial self）が教育の現場において育成されるべき自己像として表象されることで、教育は、受動的な福利の消費者から起業家的な精神（entrepreneurship）^{パスポート}をもった自己へと変身するための手段となる（Besley & Peters 2007, 164）。この「起業家的な自己」は、フーコーの「統治性」や「自己への配慮」、あるいは「生政治」といった概念を主たる足がかりとして行論を企図するフカルディアンたちによって90年代あたりからさまざまに理論化されてきた（cf. Bröckling 2007 ; Kelly 2013 ; Masschelein 2006 ; Miller & Rose 1990 ; Rose 1996 ; Simons 2006）。

たとえば、仕事を通じて自分を高めていくこと（self-enhancement）や自己実現（self-actualization）への欲望と「より柔軟になり、より競争力を備えよ」という企業の要請との共軌を通じて、人は、就職先を提供することになるであろう知識・技能を求める絶え間なき探索活動へと駆り出される（cf. Rose 1996, 339）。自分という存在をひとつの企業に見立て、「自身が持つべき（＝何事かの利益をもたらす）能力をみずから探索し、それを習得してゆく」、という自己の存在様式を資源にする生の様式^{ライフ・スタイル}。

したがって、「起業家的な生」を生きることは、生きてゆくことという継続的な業務 (continuous business of living) へと従事しつづけるためにさまざまな環境やネットワークを動き回ることであり、永続的な経済的裁定の「法／掟」に^{ノモス}応じて刻々と変転してゆく環境において限られた資源でもって生存^{サヴァイヴ}するべく、そのつどの自身の境遇を「自己と環境の一時的な平衡状態」として理解し、ある種の「機敏さ」(alertness) を含意する「予見的適応」(proactive adaptation) の動作主として、「起業家的な自己」として振舞うことである (cf. Simons & Masschelein 2008, 406 ff.)。こうして、諸個人たちは、絶えざる環境の変化に合わせて再プログラム可能な主体たちとなる (cf. 酒井 1999, 173)。

しかし、「起業家的な自己」は、学校教育を終えた者たちが選択する（あるいは選択すべき、とされる）生き方であるだけでなく、生徒たちが学校生活においてすでに実践している生き方と考えられないだろうか。授業を受け、部活動に励み、教師の問いかけに応答し、あるいはときに抵抗し、そうして学校における社会的な立ち位置を見定めてゆくこと、端的に、学校で学ぶことは、ポストフォーディズム型の労働の構造的な特質を、つまりは「起業家的な自己」の身振りを包摂しているのではないか。

ここで参照したいのは、フーコーの「生存の美学」(esthétique de l'existence) という着想である。

個人を分類し、個人にその個別性の刻印を押し、個人をそのアイデンティティに縛りつけて、彼に自分も他人も認めざるをえない真理の法を強いる日常生活……。それは個別的主体を作りだす権力形式なのである。主体という語には二つの意味がある。支配と従属によって誰かに従属していることと、良心や自己認識によって自らのアイデンティティと結びついていることである。どちらの意味も、服従させ、従属させる権力形式を示唆している。(Foucault 1983, 212=1996, 291 f.)

日々の宿題を華麗に完遂し、しかも授業のなかでの教師の質問にも的確に解答していく生徒は、「優等生」または「まじめな生徒」として他者たちから認知され、それをみずからも受け入れていくかもしれない。あるいは、野球部に所属し、キャプテンとしてチームをまとめ上げた生徒は、「頼りになるヤツ」という他者たちからの認知を内面化して、文化祭や体育祭などの行事の際には自身の所属する学級を率先する発言や振舞いを選択するかもしれない。「正しいこと」や「ヨキこと」を示す法／掟は、宿題を提出しないことやその他の逸脱行為にたいする教師の叱責として、部活動での活躍にたいする教師の賞賛として、教師の発話や身振りに明示されるだろう。あるいは、「調査書」の名目のもとに「(生徒の) 自分という存在」を説明する教師の評価する眼差しのうちに含意されるだろう。

こうして、「正しいこと／ヨキことをめぐる法／掟」にしたがい、「自分を知ること」によって、「自分という存在」に何事かの名前を付与して認識することによって、生徒たちは自身のアイデンティティへと係留される (be tied to one's own identity)。「法／掟」をみずからの身体へと刻み込んでゆくことで、生徒たちは、何者か／何事かの身体 (= somebody) へと生成してゆく。「法／掟」への従属と、「私」の存立。フーコーによれば、この二つの意味を「主体」(subject) という語は示唆している。

だから、「主体化」は、「自己との関係」を含意している。これに関連してフーコーがさらに説明していたのは、「自分自身の生を個人的な芸術作品にするというこの練り上げ」(Foucault 1994, 731=2006, 341) を手立てにして、「何者か／何事かの身体への生成」を目指すことだった。自身の生活へと絶え間なく注意を払う態度をひとつの技法と考えたフーコーにとっては、自己の生存をひとつの問題として対象化することを経て未来の自己の変容を企図することで、人は主体として存立する (Infinito 2003, 161)。自己はその結果としてさまざまな様態を取り得るだろう。「自己」を無限の潜在的様式性として引き受けることが、フーコーにとっての生存の美学^{エステティクス}だった (cf. 丹生谷 1996, 184) のであり、したがって、自己の形成は自己への配慮を要請する果てなきプロジェクトとなる (cf. Infinito 2003, 164)。学校生活を営むなかで生徒たちは、「優等生」へと、「頼りになるヤツ」へと、あるいはその他の何者かへと (あるいはときに、「何者でもないヤツ」としての「目立たないヤツ」へと)、自分という存在を彫琢してゆくだろう。

「知識、情報、資格を与える教育といったものは、労働者の最も基本的な労働と同様に、資本の部分となすもの (『知識資本』) である」(Deleuze & Guattari 1972, 278=2006, 40)、と言ったのはドゥルーズとガタリだったが、学校教育が生徒たちに与えているのは、試験によって測定される知識や情報の量および問題を解くことの精確さや迅速さ、そして、さまざまな技能の一定程度の所有を示す資格だけではなく、「ヨキこと」として評価されるであろう意欲や態度、さらに、集団生活へのある程度の適応を要請するはずのさまざまな部活動における活躍 (というあり方) でもあるだろう。ということはつまり、知識を知識資本 (capital de connaissance) として、みずからの人生の組み立てのための資本として使用することだけではなく、自己の存在の様式^{スタイル}を資本として使用することを、生徒たちは選択する。こうした場合、自己の形成において焦点になるのは、進行してゆく「生の資本化」の点からみた自分自身の強みと弱みへの絶えざる「評価／査定」(the permanent assessment) だろう (Vlieghe 2010, 155)。生徒たちの可塑性を主たる資源にした「起業家的な自己」の構成が奨励され、「正しいこと／ヨキことをめぐる法／掟」を代理＝表象する教師の評価する眼差しによって、「主体」としてみずからが選び取った現在のありよう

が評価される。「法／掟への従属」,「掟の門前」に屹立する教師,そして、みずからの存在の可塑性を資源にして「何者か／何事かの身体」へと生成してゆく生徒たちの三幅対によって出来る学校教育。

おわりに

高等学校の入学試験をひかえた中学三年生の少年の物語に、福永武彦の「夜の寂しい顔」がある。そこにはつぎのような一節がある。

二郎はいい漁師になるだろう。三郎もまたいい漁師になるだろう。そこには存在というものがある。しかし僕は何になるだろうか。勉強をして、高等学校には行って、それから何になるだろうか。何一つまだきまってはいないのだ。入学試験の試験官が、僕の答案に八十点をつけるか六十点をつけるかで、僕の運命はどんなふうにも変わってしまうだろう。僕にはまだ存在というものがない。(福永 1987, 273)

ここに登場する「僕」は、夏休みを母の実家で過ごし、「入試」のために「勉強」する。漁師たちの村であるその地には中学二年生の二郎とその弟の三郎がいて、二人ともが親の家業をつぐであろうことを、漁師として生きていくであろうことを、周囲の者たちは確信している。

この一節に記されているのは、試験の答案にたいして付与される点数によって左右されるみずからの「存在の虚ろ」への憂慮であり、試験の答案の点数と、それに根拠づけられ位階序列化された学校の卒業資格との接続だろう。入学試験の出来・不出来によって入学可能な学校が決定され、入学を許可された学校が備えているある種の「格」によって、今度は、就職可能な職業が決定される。社会における人員を分配するシステムとしての学校、そして競争が激化し、それに疲弊する者たちの声によって出来る学歴問題。かつては試験の点数こそが、未来の存在(「来るべき私」)へと接続していた。

けれども、学校生活の総体が教師の評価の眼差しに曝されることがすでに生起しているならば、生徒たちの学びの意味は、「理解することの認識論的な地平」(＝試験に的確に、かつ迅速に解答する能力の水準)において存立するだけではなく、この社会において生き抜いてゆくことの技法へと収斂しているはずであり、つまり、「生存することの存在論的な地平」において、「主体としての私」を構成するための生存のエステティクスとして、出現しているはずだ。

他者たちとの関わりへと埋め込まれ、他者たちと共有する象徴的なものの網目へと絡み

とられることで、「私という存在」を欲望する者の欲望が構成されることを示唆していたのはコジエヴを通じた「欲望」という、さらに「象徴的なものの網目」というラカンの精神分析理論だったが、学校生活における一つひとつの振舞いが「調査書」に記入され、さまざまな「業績」として説明され（＝「活躍」や「逸脱」という名が与えられ）ることは、生徒たちにとっては、象徴的なものの^{コンステレーション}布置へと嵌め込まれることを意味しているだろう。そして、ヘーゲルの承認をめぐる闘争論にたいするバトラーの読解が示唆していたのは、そもそも、自律（autonomy）という語を構成している“auto”が「自己」を意味し、“nomos”が「法」を意味している（cf. Besley & Peters 2007, 56）ように、権力の非対称性において生きる者が、権力をより保持する者の統治の身振りにたいして愛着を抱くということだった。

生徒たちは、教師が代理＝表象する^{ノモス}法／掟に応答するなかで、教師の評価する眼差しが「ヨキこと」と見なす振舞いを予見的に先取りして自身を律する実践を遂行し、そして、ポストフォーディズムの労働者たちは、経済的裁定の^{ノモス}法／掟に応答するなかで、そのつどの境遇の変化にたいして機敏に動き、何事かの利益をもたらすと予見される知識・技能の習得をみずからの手によって遂行して、不安定化し、柔軟化している労働市場で生存していく。この二つの事態のある種の同期は、学校生活における生徒たちのありようと起業家的な自己のありようとの構造的な同形性を明示しているのではないか。

だとすれば、いますでに何者かであったとしても、環境の変化に応じてまたべつの何者かへと生成変化しなければならないことに淵源する脆弱性を、ということつまり、主体として自分自身の形成に参与することの意図されざる効果として付与される脆弱性をみずからの内に抱えたまま、生徒たちは学校生活を送るだろう。未来への希望（＝欲望）が分節化する「何者かとしての私」が絶えず生成変化しなければならないがゆえに、果てなき脆弱性を自分たちの存在様態に刻印する。

ならば、冒頭で紹介した教師が語っていた「生徒の素直さ」とは何だろうか。学校＝教師が体现する法／掟への愛着だろうか。あるいは、ポストフォーディズム型の労働として「起業家的な自己」という存在様式が要請され、その必然的な帰結として失業や離職というリスクと共存する生活様式が常態化していることにすでにして気づいている生徒たちの、脆弱性がこの先もきっと解消されないということへの諦観だろうか。

【引用・参考文献】

- Althusser, L. (1993) *Écrits sur la psychoanalyse: Freud et Lacan*. Paris: Stock/IMEC. = 石田靖夫・小倉孝誠・菅野賢治訳 (2001) 『フロイトとラカン：精神分析論集』人文書院。
- Besley, A. C. (Tina) & Peters, M. A. (2007) *Subjectivity & Truth: Foucault, Education, and the Culture*

- of Self. New York: Peter Lang.
- Boothby, R. (1991) *Death and Desire: Psychoanalytic Theory in Lacan's Return to Freud*. New York: Routledge.
- Brennan, T. (1990) History after Lacan. *Economy and Society*. 19 (3), pp. 277-313.
- Bröckling, U. (2007) *Das Unternehmliche Selbst: Soziologie einer Subjektivierungsform*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Butler, J. (1997) *Psychic Life of Power: Theories in Subjection*. California: Stanford University Press. = 佐藤嘉幸・清水知子訳 (2012) 『権力の心的な生：主体化＝服従化に関する試論』月曜社。
- Deleuze, G. & Guattari, F. (1972) *L'Anti-Édipe: Capitalisme et schizophrénie*. Paris: Les Éditions de Minuit. = 宇野邦一訳 (2006) 『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症 下』河出文庫。
- Fink, B. (1995) *The Lacanian Subject: Between Language and Jouissance*. New Jersey: Princeton University Press. = 村上靖彦監訳 (2013) 『後期ラカン入門：ラカンの主体について』人文書院。
- Foucault, M. (1983) The Subject and Power. Dreyfus, H. L. & Rabinow, P. (eds.) *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*. Chicago: The University of Chicago Press. pp. 208-226. = 山田徹郎訳 (1996) 「主体と権力」山形頼洋・鷲田清一ほか訳『ミシェル・フーコー：構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房, 287-307頁。
- (1984) *L'usage des plaisirs: Histoire de la sexualité 2*. Paris: Gallimard. = 田村俣訳 (1986) 『性の歴史Ⅱ：快楽の活用』新潮社。
- (1994) Une esthétique de l'existence. *Dits et écrits IV: 1980-1988*. Paris: Gallimard. pp. 730-735. = 増田一夫訳 (2006) 「生存の美学」小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション5：性・真理』ちくま学芸文庫, 337-349頁。
- 福永武彦 (1987) 「夜の寂しい顔」『福永武彦全集 第四巻』新潮社, 261-280頁。
- Hegel, G. W. F. (1841) *Phänomenologie des Geistes: Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Werke*. Berlin: Duncker und Humblot. = 長谷川宏訳 (1998) 『精神現象学』作品社。
- Hyppolite, J. (1971) *Figures de la pensée philosophique: Écrits de Jean Hyppolite (1931-1968) tome premier*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Infinito, J. (2003) Ethical Self-Formation: A Look at the Later Foucault. *Educational Theory*. 53 (2), pp. 155-171.
- Julien, Ph. (1990) *Pour lire Jacques Lacan: Le retour à Freud*. Paris: E. P. E. L. = 向井雅明訳 (2002) 『ラカン、フロイトへの回帰：ラカン入門』誠信書房。
- Kelly, P. (2013) *The Self as Enterprise: Foucault and the Spirit of 21st Century Capitalism*. Farnham: Gower.
- Kojève, A. (1947) *Introduction à la lecture de Hegel: Leçons sur la phenomenology de l'esprit, Professees de 1933 à 1939 à l'École des Hautes-Études*. Paris: Gallimard. = 上妻精・今野雅方訳 (1987) 『ヘーゲル読解入門：『精神現象学』を読む』国文社。
- Lacan, J. (1966) Function et champ de la parole et du langage en psychoanalyse. *Écrits*. Paris: Édition du Seuil. pp. 237-322. = 竹内迪也訳 (1981) 「精神分析における言葉と言語活動の機能と領野」宮内忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次訳『エクリ I』岩波書店, 321-445頁。
- (1973) *Le séminaire Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychoanalyse*. Paris: Editions du Seuil. = 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳 (2000) 『精神分析の四基本概念』岩波書店。
- (1978) *Le séminaire Livre II: Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychoanalyse*. Paris: Éditions du Seuil. = 小出裕之・鈴木國文・小川豊昭・南淳三訳 (1998) 『フロイト理論と精神分析技法における自我 下』岩波書店。

- (1981) *Le séminaire de Jacques Lacan Livre III: Les psychoses*. Paris: Éditions du Seuil. = 小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳 (1987) 『精神病 下』岩波書店。
- Langlitz, N. (2005) *Die Zeit der Psychoanalyse: Lacan und das Problem der Sitzungsdauer*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Lemaire, A. (1977) *Jacques Lacan*. Liège: Bruxelles. = 長岡興樹訳 (1983) 『ジャック・ラカン入門』誠信書房。
- Macey, D. (1995) On the Subject of Lacan. Elliot, A. & Frosh, S. (eds.) *Psychoanalysis in Contexts: Paths between Theory and Modern Culture*. London: Routledge. pp. 72-86.
- Masschelein, J. (2006) Experience of the Limits of Governmentality. *Educational Philosophy and Theory*. 38 (4), pp. 561-576.
- 松下佳代 (2010) 「〈新しい能力〉概念と教育：その背景と系譜」松下佳代編『〈新しい能力〉は教育を変えるか：学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房, 1-42頁。
- 松下良平 (2009) 「リキッド・モダンな消費社会における教育の迷走：文化と消費の抗争」『現代思想 特集：変わりゆく教育』青土社, 37 (4), 114-142頁。
- Miller, P. & Rose, N. (1990) Governing the Economic Life. *Economy and Society*. 19 (1), pp. 1-31.
- 森口秀志編 (1999) 『教師』晶文社。
- 中村高康 (1999) 「受験体制としての『調査書重視』：入学者選抜にみる教育システムの変容」古賀正義編『〈子ども問題〉からみた学校世界：生徒・教師関係のいまを読み解く シリーズ 子どもと教育の社会学2』教育出版, 28-46頁。
- 丹生谷貴志 (1996) 『ドゥルーズ・映画・フーコー』青土社。
- 大沢真理 (2004) 「逆機能に陥った日本型セーフティネット」橋本俊昭編『リスク社会を生きる』岩波書店, 53-84頁。
- Rose, N. (1996) The Death of the Social? : Re-Figuring the Territory of Government. *Economy and Society*. 25 (3), pp. 327-356.
- Roudinesco, É. (2011) *Lacan, envers et contre tout*. Paris: Seuil. = 信友建志訳 (2012) 『ラカン, すべてに抗って』河出書房新社。
- 酒井隆史 (1999) 「リベラリズム批判のために：リベラリズムの回帰と『市民社会の衰退』」『現代思想 特集：市民とは誰か』青土社, 27 (5), 156-179頁。
- 作田啓一 (2003) 『生の欲動：神経症から倒錯へ』みすず書房。
- Simons, M. (2006) Learning as Investment: Notes on Governmentality and Biopolitics. *Educational Philosophy and Theory*. 38 (4), pp. 523-540.
- Simons, M. & Masschelein, J. (2008) The Governmentalization of Learning and the Assemblage of a Learning Apparatus. *Educational Theory*. 58 (4), pp. 391-415.
- Stavrakakis, Y. (1999) *Lacan and the Political*. London: Routledge. = 有賀誠訳 (2003) 『ラカンと政治的なもの』吉夏社。
- Usher, R. & Edwards, R. (1994) *Postmodern and Education*. London: Routledge.
- Vlieghe, J. (2010) Judith Butler and the Public Dimension of the Body: Education, Critique and Corporeal Vulnerability. *Journal of Philosophy of Education*. 44 (1), pp. 153-170.